

平成三年三月、私達一家は久留米市から、旧三井郡北野町に移り住んだ。西鉄甘木線大城駅から徒歩六〜七分、次の金島七号踏切からほぼ三分位の沿線に、私達の新しい住まいはあった。

その日から、甘木線と私達家族の歴史は始まった。

当時、長女は小学四年生、長男は三年生で、学校前駅の宮ノ陣小学校から、金島駅の前にある金島小学校へ転校する予定になっていたが、終業式間近ということもあって、三月一杯は宮ノ陣小学校に通い、四月進級と同時に金島小学校へ転校する事にした。

娘と息子は自分達だけで電車登校するのは初めての経験で、心細く不安な表情をしていた。大城駅から学校前駅まで距離にして八キロ、時間にして十分余りというものの、緊張気味の子供達には途方もなく長く感じられたようだった。

ある日弟の方が、切符を何度も確認するうちに失くしてしまったらしく、姉と二人でどうしたら降りることができるとか悩んだという事があった。やっとの思いで駅員さんに本当のことを伝え、「これから気をつけなさい」と通してもらった時の二人の安堵の表情が浮かぶ。その頃我が家は久留米市内で青果業を営んでおり、夫は朝早く市場に出かけ、運転免許の無い私は、子供達が学校に行った後、甘木線の電車で店に通うのが日課になった。

ある朝、娘が登校前に吐き気をもよおし元気がない。転校したばかりで情緒不安定のうえ、内気な性格でクラスになじめず、もしかしたら不登校の前兆ではないかと心配に。私は、ランドセルを背負わせ、久留米駅まで一緒に行き近くの小児科に診せたあと、甘木行きの電車に乗せた。

「金島駅で降りなさい。学校に電話しておくから、ちゃんと学校に行くのよ。」娘は元気はないものの、健気にも

「うん」

と首をたてに振った。可哀想で張り裂けるような胸の思いを隠して電車を見送り、仕事場へと向かった。親も子も試練の時だった。

子供達が小学校を卒業するまでの三年間は学校行事の度に、店をぬけて甘木線で学校にかけつけ、多忙な時期ではあったが楽しく過ごせた時期ではあった。

あれから三十三年、娘は二児の母に、息子は三児の父となった。

平成十八年七月、娘は里帰りしてきて長男を出産した。初孫の誕生である。

この孫息子が無類の電車好きだった。まだ言葉も出ない一才足らずの頃から、我が家に来る度、電車の気配を感じるや何をしていても“ハッ”と身がまえた。私の側に来て、電車を見に行こうとせがみ、外に出たがった。金島駅あたりから下り電車の“カンカンカン”と聞こえてくると、私は孫息子をベビーカーに乗せて金島七号踏切まで走り、下り電車に、孫と一緒に手を振るのだった。運転手さんは白い手袋で敬礼をして下さったり、笑顔で手を振ったり、中には軽く“ホワーン”と警笛を鳴らし、て下さったりの神対応に孫は大喜びだった。甘木線は三十分間隔で通るので、上下線十五分おきに通過することになる。その十五分間、線路沿いに散歩をしては反対側から来る電車に手を振って家に戻る。何度繰り返しても孫は一向に飽きることもなく、気付くのが遅れて、電車の音が近づくと、急げ急げとせかさればビーカーを押す手に力をこめて走った。電車に手を振る光景は小学校に入る頃まで続き、「まだ手を振ってるの。」

と知人に呆れられる程だった。その孫も今年受験生だ。

西鉄甘木駅開業百周年のめでたい記念の年に、共に三十三年の月日を刻んだことは感慨深い。我が家の歴史と共に西鉄甘木線の電車はこれからも走り続ける。人々の人生を、歴史をのせて。